

「つつまし」の文学史―源氏物語以前―

中川 正 美

一 はじめに

文学はある事態に遭遇した人間を描出していくのだが、人間が社会のなかで生きる存在である以上、そこにはものごとや人など、他者との関わりが発生する。文学作品の考察ではそうした他者との関わりが鍵となる。

これまで「あふ」「対面す」「へだつ」の動詞、「いとほし・心苦し」「うし・心うし」「親し・むつまし」「めざまし」「はづかし・やさし」などの形容詞を取り上げて、人と人との関係を探り、物語の構築を考えてきたが、本稿では「はづかし」と類義とされる「つつまし」を取り上げて、源氏物語に先行する文学の展開を考えていきたい。

「つつまし」はある行為をしたのだが、ためらうものがあつて行動に移せないと控える感情で、先に「平安仮名文の『はづかし』付『やさし』『つつまし』」（『梅花女子大学文化表現学部紀要』第四号、二〇〇七年一月、『平安文学の言語表現』和泉書院二〇一一年三月所収）で類義の「はづかし」と比較したところ、同じ文脈で同一人が主体の場合は「はづかし」が「つつまし」の原因となっており、「はづかし」が主体の状態や弱み、自責の念に基づく感情であるのに対して、「つつまし」は主体が相手や世間を慮って自らの言動を規制する感情で、その結果どうふるまうかに焦点があり、「はづかし」が精神性を表すのに対して、「つつまし」は言動の実行を含有しており、行為性を表すと述べた。源氏物語では「つつむ」六四例、「つつまし」一三九例と「つつまし」が二倍以上用いら

れており、地の文が六一%を占めているのに対して、先行作品ではおおむね「つつむ」の方が多く、会話や手紙の直接話法の方に多く認められる。こうした先行する和歌や物語日記について考えていく。

二 「つつむ」歌の表現型

「つつむ」は万葉集に一例、八代集では古今集に二例、後撰集に三例、拾遺集に一例、後拾遺集に三例、金葉集に二例、詞花集に一例、千載集に八例、新古今集に四例認められるが、「つつまし」は後拾遺集に一例にすぎない。和歌ではもっぱら「つつむ」が用いられていて、これら二五例のうち二三例が恋愛に関して用いられている。そして、恋の障害となるのは「人目つつみ」八例で顕著のように第三者や世間が一五例、和歌の相手が八例、詠み手自身の行動が一例となる。こうした「つつむ」歌の表現型についてみていこう。源氏物語以前の物語日記の展開を探るのだから、和歌も後拾遺集までを中心に述べていく。

〈イ〉自己規制しない 三例

①石上降るとも雨につつまめや妹に逢はむと言ひてしものを

（万葉・四・六六四・大伴宿祢像見）

②身のならむことをも知らず漕ぐ舟は波の心もつつまざりけり

（後撰・恋五・九五九・清蔭）

①の万葉集では「つつまめや」と反語で、雨が障害であっても、約束通り女に逢いに行くと言挙げしており、月夜の逢瀬が常であった時代（古橋信孝『雨夜の逢引』大修館書店一九九六年一月）に、障害などものともしない、私を留めるものは何もない、と我が愛の強さ、恋情の激しさを謳い挙げ

ている。②は清蔭が御匣殿の別当に贈った歌で、「漕ぐ舟」は男の謂い、波は世間で、波に遮られ翻弄されても航行していく舟のイメージを出して、ひたすらあなたに向かう私の心は、世間に知られてわが身がどうなるかなど気にかけない、告白せずにはいられないのですと訴えている。

この型では障害は雨や波だから自然現象なのだが、後撰集の波は擬人法で、平安和歌になって「つつむ」対象が人間に変わっていることをよく示している。なお詞花集九一番は、今晚は七夕の逢瀬だと誰でも知っているのだから、別れねばならぬ明け方でも人目など気にせず、心ゆくまで名残を惜しんでほしいと牽牛たちを思いやる変形である。

〈ロ〉自己規制する 七例

③思へども人目つつみの高ければ川と見ながらえこそ渡らね

(古今・恋三・六五九)

④沖つ波うち出でむことぞつつましき思ひ寄るべきみぎはならねば

(後拾遺・恋一・六〇八・源頼家母)

⑤心からしばしとつつむものからに鳴の羽搔きつらき今朝かな

(新古今・恋三・一一七九・赤染衛門)

③は「堤」と掛けて世間の人目が堤となつて高くそびえている景を障害として呈示し、「川」に「彼は」を掛け、あの人が対岸にいると見ながら川を渡ることができないように人目を「つつむ」ために逢うことができないと嘆く想いがみごとに形象化されている。激流がほとぼしるのを堤が留めるように、なぜ、このたぎる想いが世間の目を気にして押さえ込まれるのだろうか、と嘆く古今歌もある。④は夫の喪中の主人に取り持ちを依頼された乳母に代わって、当の主人が返した歌で、お返事などできないとはねつけたとも、今は心の内を明かすことなどできないと喪明けに含みを持たせたとも取れるのだが、自己規制するという点では変わらない。⑤は新古今集だが、赤染衛門の歌で、理性ではしばらく逢わな

いと決めたのだが、鳴が仲良くしているのを見るとつらいと感情を制御できない自身を嘆いている。他に千載集に二例、新古今集に一例認められる。

〈ハ〉自己規制するのだが規制しきれず、漏れてしまう 一一例

⑥つつめども隠れぬものは夏虫の身より余れる思ひなりけり

(後撰・夏・二〇九)

⑦逢ひ見てもつつむ思ひのわびしきは人間にのみぞ音は泣かれける

(後撰・恋三・七九〇・有好)

⑧人目をもつつまぬものと思ひせば袖の涙のかからましやは

(拾遺・恋二・七六四・実方)

⑥は桂親王に螢を捕らよと命じられて童の汗衫の袖に包んで献上したという夏の歌だが、「包む」に「慎む」を、「思ひ」に「火」を掛けて、螢の火が袖で包んでも漏れるように、あなたへの想いを規制して隠そうとしても漏れてしまいますと恋歌仕立てにしている。⑦⑧はいずれも忍ぶ恋で、⑦では契りを結んでも人目を気にして過ごさねばならないので、人のいない時に声を上げて泣いてしまう、と切ない想いを詠み、⑧ではそんな自分の姿を恋する人に訴えている。この型は「つつめども」の類句が用いられることが多く、金葉集二例、千載集四例、新古今集三例と最も多いが、恋部におさめられているすべてが我慢できず涙すると詠む、題詠歌も多く、大同小異である。

〈ニ〉自己規制していたのだが、我慢できず、規制を破つてその行為をする 二例

⑨つつめどもたえぬ思ひになりぬれば問はず語りのせまほしきかな

(千載・恋一・六四九・成通)

⑩恋しさを憂き身なりとてつつみはいつまでありし心なるらむ

(千載・恋一・六八一・源師光)

いずれも気兼ねして想いを隠してきたが、我慢できなくなったので告白すると詠むのだが、⑨は問わず語りをしたくなってしまったといい、⑩はあなたに受け入れられそうもないと思つて遠慮して何も申しませんでした。したが、そういう心はいつまでであったのでしょうか、今はもう、忍びきれませんかと恋情を告白している。この型は八代集ではずいぶん遅いが、散文では既にうつほ物語と源氏物語に「身につつまるものならば」（藤原の君一七三）「うれしかりしもえこそつつまね」（菊の宴五九）「咲く花に移るてふ名はつつめども折らで過ぎうきけさの朝顔」（夕顔一四八）「花の枝にいとど心をしむるかな人の咎めむ香をばつつめど」（梅枝四〇七）と、仮定法や、不可能、逆接の語法で、早くから我慢しきれず告白する型が認められる。源氏物語までの仮名文の作中歌で「つつむ」が認められるのはこの四例だけなのである。

恋歌でない二首は後拾遺集で、娘の没後、越前に下向する婿に餞別の衣を贈る際に涙がこらえきれないと詠む哀傷と、連絡がないので無沙汰をしていたが、どうやら所在が知られたようですと詠む友情の歌で、いずれもハ型である。

こうしてみると、「つつむ」歌の表現型は自己規制に関して、

イ 規制しない

ロ 規制する

ハ 規制しきれず漏れてしまう

ニ 規制しても我慢できず表出する

となろう。散文ではこうした表現型が恋の様相として通底して用いられている。

三 初期物語

竹取物語ではかぐや姫が八月一五日頃の月を見て泣くところに「つつ

む」が認められる。

①八月一五日ばかりの月に出でて、かぐや姫、いといたく泣きたまふ。人目も今はつつみたまはず泣きたまふ。これを見て親どもも、

「何事ぞ」と問ひ騒ぐ。

（竹取物語六五）

かぐや姫と月との関わりは三段階で語られていく。最初は春の初め、帝との交遊も三年を数える時、かぐや姫は「おもしろう出でたる」月を見て常よりも思いをするふうを見せた。月を見るのは不吉と制されても、人目のない時に見て「いみじく泣」いていた。それが秋の七月一五日には簀子に出て見るようになり、「せちに」もの思う様子を見せるまでになつていた。そのため女房が翁に進進し、翁からどうしてこの「うまし世」にももの思う様子で月を見るのか、何を思い悩んでいるのかと尋ねられ、月を見ることを制されても、やはり見続け、ため息をついて泣くようになる。そしてひと月後、八月一五日近くの月になると「いといたく泣きたまふ」「人目も今はつつみたまはず泣きたまふ」と「泣く」を繰り返し、今となつては「つつみたまはず」と、これまで「つつ」んできたが、もう、「つつむ」のに堪えきれなくなり、人目も気にせず泣いてしまつてと、第三段階で初めて「つつむ」が用いられて、堪えきれず、心配する親たちに事情を証すことになる。これは自己規制しきれずに泣いてしまう「つつむ」歌のハ型で、その結果、真相が明らかにされ、姫を守ろうとする方向に事態が動いていく。この「つつみたまはず」は転換点なのである。

歌物語では、伊勢物語に「つつむ」一例、大和物語に「つつまし」一例、平中物語に「つつむ」六例が認められるが、これら八例はすべて恋愛に関して用いられている。

注目すべきは、和歌とはちがって、親に対して「つつむ」例がめだつことである。

②むかし、いと若き男、若き女をあひ言へりけり。おのおの親ありければ、つつみて言ひさしてやみにけり。(伊勢物語八六段・一八九)

③さりけれど、この男、いらへをだにせずなりにけり。何の身の高きにもあらず、親、かく憎げに言ふ、めざまし。女も親につつまければ、さてやみぬ。(平中物語二四段・四九三)

②の伊勢物語八六段では「おのおの親ありければ、つつみて言ひさしてやみにけり」と恋心を確認し合って交際していた男女が反対にあったのか、それぞれの親に遠慮して結ばれることを断念し、③の平中物語二四段では、女が親に気兼ねしたので男が嫌気がさして関係を絶っている。

この段は伊勢物語五段とシチュエーションが同じ、保護者に忍ぶ恋で、伊勢物語は「通ふ」だが、大和物語では相手は近江守の娘で「すみけり」というのだから既に婚姻生活を始めている。それを親が感づいて女に文句を言い、門を閉ざして見張ったので、男は築地を越えて忍び入って連絡を取ったが、女の方はお引き取りくださいと言って超越した。伊勢物語では男の歌に感動して保護者が許したのだが、大和物語では逆で、地方官風情の親の反応も無礼で、そんな親に従う女も気に食わず男が見放したという。伊勢物語では歌が転換に大きな役割をしたが、大和物語では「つつむ」が終焉を如実に語っているといえよう。また平中物語三六段では男が「親の心を世に知らずつつみければ、え行かで」と、親に気兼ねして旅先で再会した女の待つ所にも行けなかったという。和歌では顧慮する障害は世間一般であることが多いが、物語では具体的な障害として親が挙げられている。生計を共にしていたためもあるが、社会風俗としての婚姻が、自由恋愛というより、家格の似た交友範囲で行われるのが実際であったことを窺わせよう。

もちろん、和歌のような「つつむ」も認められる。

④同じ男の、心のうちにつつまむこと、はた似げなうありければ、かか

る嘆きになむあるともえ言はで、ただ気色になむ見せける。女いとあさましと思ひよる気色を、男見てぞ、かの人のいと近くて使ふ人に語らひつきて、(平中物語三段・四六〇)

心のうちに恋情を「つつむ」といい、「似げなう」というのだから、これは身分違いの女に対する片恋で、歌などで打ち明けようもなく、素振りでの恋の苦悩を知らせたという。「つつむ」歌の、規制してもおのずと恋情が現れてしまうハ型を変形し、意図的に漏らして告白するのである。大和物語では「つつまし」で、「つつむ」歌とは状況も変わっている。

⑤かく行かぬをいかに思ふらむと思ひ出でて、ありし女のがり行きたりけり。久しく行かざりければ、つつましくて立てりける。さてかいまめば、(大和物語一四九段・三八三)

伊勢物語二三段と同種の前妻と後妻の歌徳説話の後日談で、男が後妻を訪れるところである。女の所に行っても「つつましくて」案内も請わず、外に立ったままであった。男には夜離れしていたと負い目があるため、気兼ねしていつものようにはふるまえなかったのである。それで垣間見して女の意向を探ろうとし、くつろぎすぎたさまを目にしてすっかり心が覚めてしまう。「つつむ」歌では、片恋や忍ぶ恋に苦しむ者の思いを表現するのだが、物語では、この「つつまし」が苦悩を与える側の自覚とそれゆえのためらいを表すように、人と人の関係における心の揺れを語るものである。ここは伊勢物語には認められない部分である。

歌物語の「つつむ」「つつまし」「つつまじ」は恋に関連して用いられているのだが、作中歌には「つつむ」も「つつまし」も認められない。あくまでも散文のなかで男女の想いを語るものとして用いられているのである。そして歌物語と言いつつ、障害のない恋などはあまり語られないから、片恋であれば相手に言い出しかねる想い、契りを結んでいても忍ぶ恋で、相手に逢いに行く局面が語られる。したがって具体的な恋の困難として身

近な親が障害となり、親の意向が取り上げられる。「つつむ」歌の型を変じたり、和歌に認められない、負い目を持つ者が相手に「つつましく」接する表現も創出されている。和歌は主情を詠むだけだが、物語は「つつむ」「つつまし」によって人と人との関係の複雑さが語られていく。

四 蜻蛉日記・和泉式部日記

蜻蛉日記になると、兼家と道綱母の夫婦のありようが「つつむ」「つつまし」で語られている

①いかなる折にかあらむ、文ぞある。「参り来まほしけれど、つつましうてなむ。たしかに來とあらば、おづおづも」とあり。返り事もすまじと思ふも、これこかれ「いと情なし、あまりなり」などものすれば、

穂に出でていはじやさらにおほよそのなびく尾花にまかせても
見む

立ち返り、

穂に出でばまづなびきなむ花薄こちてふ風の吹かむまにまに

(蜻蛉日記上―一〇)

「つつまし」が認められるのは天徳元年七月頃の兼家から筆者道綱母への文で、伺いたいのだが遠慮されて、そちらが来ていいと欲してくれるのなら、おずおずと、と低姿勢で許可を求めている。というのは町小路女の件がまだ尾を引いていて、二十日余り途絶えていたからで、筆者は「つれなく」来た兼家を冷たくあしらったり、月初めの相撲節会の頃に仕立物を頼んできても返したりしている。そうした結果の「つつましう」なのである。筆者は返事もすまいと突っぱねようとするが、女房たちから取りなされて、私の方からはお出でくださいなどとは申しません、あなたのお心次第にと返歌し、いや、はつきり来てほしいと言われるなら

行くのだが、などと言いつつ合った後、兼家が再び姿を見せるようになっていく。この挿話を記したのは、兼家の方から「つつまし」と言って関係の修復を働きかけ、その結果、訪れが常態に近くなったからであろう。一方で、天禄二年六月の鳴滝参籠では、兼家が「つつむことなく」歩み入っている。

②釣りする海人のうけばかり思ひ乱るるに、ののしりて、もの来ぬ。

さなめりと思ふに、心地まどひたちぬ。こたみはつつむことなくさし歩みて、ただ入りに入れば、わびて几帳ばかりを引き寄せて端隠るれど、何のかひなし。
(蜻蛉日記中・二五〇)

兼家は道綱母が鳴滝に籠もってしまった当日の夜、物忌みにもかかわらず駆けつけ、以後ひと月にわたって、使者を送り、道綱を叱責し、時姫腹の道隆を差し向けたりなど、さまざまに手を尽くして帰京を働きかけている。道綱母の方は姉妹や親族に訪問され、最後には父倫寧が上京したその足でやってきて、道綱のやつれを指摘し山を下りることを勧めるので、去就を決めかね思い乱れていた。と、そこに、突然警蹕の音が高く迫ってくる。兼家らしいと気も動転する筆者を尻目に、兼家は今回は遠慮せず、ずかずか入ってきて、道綱に指図して片付けさせ、強引に筆者を連れ帰る。その態度を端的に示すのが「つつむことなく」で、筆者の驚きとまどい、そしてなにがしかの安堵を浮かび上がらせている。①の「つつまし」と②の「つつみなく」で、身を低くして筆者の意向を気にする姿と、有無を言わせず行動して筆者を連れ帰る、頼もしい姿がみごとに描き分けられている。とはいえ、自分を尊重してくれる姿も、力強く隘路から助け出してくれる颯爽としたふるまいも、いつてみれば筆者にとつての兼家のすてきな一面で、これらはそんな夫に大切にされている自身をも語る、自尊心を満足させる挿話といえよう。

興味深いのは手紙の文面に「つつまし」二例「つつむ」二例が認めら

れることである。

③ 「あやしと思されぬべきことなれど、この禪師の君に、心細き憂へを聞こえしを、伝へきこえたまひけるに、いとうれしくなむのたまはせしと承れば、喜びながらなむ聞こゆる。けしうつつましきことなれど、尼にと承るには、むつましきかたにても、思ひ放ちたまふやとてなむ」などものしたれば、

(蜻蛉日記下二八三)

④ 「いとおほけなき心のはべりけると、思し咎めさせたまはむを、つつみはべりつるになむ。ついでなくてとさへ思ひたまへしに、司召見たまへしになむ、この助の君のかうおはしませば、参りはべらむこと、人見咎むまじう思ひたまふるに」など、いとあるべかしう書きて、

(蜻蛉日記下三二五)

③は天禄三年二月に筆者が養女を迎えたいと先方に出した文、④は天延二年二月に右馬頭遠度から養女への求婚の文で、保護者への挨拶が後れたのを詫びて許可を求めている。いずれも初めて相手に挨拶する際のぶしつけを断る、現代で言えば「初めてお便りする失礼をお許しください」に当たる、言い訳の挨拶表現である。遠度にはもう一通「例よりも急ぎきこえさせむとしつるを、いとつつみ思ひたまふことありてなむ。」(下三四八)と連絡が遅れたことを謝る文もある。そう考えると①の兼家が伺いたいと打診した文も言い訳にほかならない。これらは「つつまし」語彙を用いて相手にへりくだってみせる、日常性の勝った挨拶表現なのである。夏の暑さに南の廂に出た筆者が人の気配を感じて、「つつまし」と身を隠す、当時の女性のたしなみが窺われる例もあるとはいえ、蜻蛉日記の「つつむ」「つつまし」は夫婦の関係、他者との交際交流を示しているのである。

和泉式部日記では「思しつつむ」二例、「つつまし」五例が敦道親王と和泉式部との恋の展開に即して認められる。この日記は、為尊親王の

亡くなった季節が巡ってきて哀しみに暮れる式部の前に、故親王の文遣いだった小舎人童が現れるところから始まる。

⑤ 「そのこととさぶらはでは、馴れ馴れしきさまにやと、つつましうさぶらふうちに、日ごろは山寺にまかり歩いてなむ。いとたよりなく、つれづれに思ひたまうらるれば、御かはりにも見たてまつらむとてなむ、帥の宮に参りてさぶらふ。」と語る。(和泉式部日記一七) どうして久しく来なかったのかと取り継ぎの女房に言わせると、取り立てて用もないのに参るのは馴れ馴れしいようで「つつましうさぶらふうちに」と無沙汰の挨拶をし、そして、今は弟宮の敦道親王にお仕えしており、本日はその使いで参りましたと橘の花を差し出す。ここから式部と敦道親王の交流が始まる。

そして贈答が続いた後、宮が思いがけず式部を訪れて結ばれるのだが、ここから宮の言動に「思しつつむ」二例「つつまし」二例が顔を覗かせる。

⑥ 御覧じて、げにいとほしうもと思せど、かかる御歩きさらにせさせたまはず。北の方も、例の人の仲のやうにこそおはしまさねど、夜ごとに出でむもあやしと思しめすべし。「故宮の果てまでそしられさせたまひしも、これによりてぞかし」と思しつつむも、ねんごろには思されぬなめりかし。

(和泉式部日記三三)

⑦ 「さりや。人もなき所ぞかし。今よりはかやうにてを聞こえむ。人などのある折にやと思へば、つつましう」など物語あはれにしたまひて、

(和泉式部日記三二)

⑥は式部から昨夜初めて結ばれ、後朝の贈答で互いの心を確かめ合ったのに、今日のお出でも期待できないなんてと嘆く歌を贈られて、かわいそうに思いながらも、「思しつつ」んだ結果、行かないことを選んだという。それは夜歩きなどまったくなさらないので北の方に顧慮し、兄宮

もこの女ゆえに誹られたのだとためらい、思案された結果であった。以後は式部が引けば宮が情熱的になり、宮が疑念を持たれば式部が積極的になる、といったふう^⑦に気持が互い違になり、宮の夜歩きが顕れると宮人からも制され、宮も帝や道長、春宮を顧慮して「思しつ々むほどに」夜離れが続くようになる。

⑦はそんな宮がかるうじて式部を訪れ、「いざたまへ、今宵ばかり。人も見ぬ所あり。心のどかにもなとも聞こえむ」と車に乗せて、深更の人もいない宮邸の廊に連れて行った時のことばである。あなたの所では誰かが来合わせているかもしれないと思うと「つつましう」て訪れなかったとは嫉妬以外の何ものでもない。この夜、式部の家を訪れた時も、来たくなかつたわけではない、来なかつたのは「御あやまち」のせいだ、私が訪れることを不都合に思う男たちが大勢いるようだからと感情をぶつけており、⑦はその誤解が尾を引いたことばなのである。そのうえで「おほかたもつつましきうち」と世間に気兼ねしてと無沙汰を弁解している。宮は周囲の諫めと誤解、多情な女との噂も相まって式部を信じ切れない。式部もまた同様で、以後もそれぞれの動揺が語られていく。一方、式部に「つつまし」が認められるのは「手枕の袖」を詠み合つて、互いの心を信じ合つた後である。

⑧かくてあるほどに、またよからぬ人々文おこせ、またみづからも立ちさまよふにつけても、よしなきことの出で来るに、参りやしなましと思へど、なほつつましうてすがすがしうも思ひ立たず。

(和泉式部日記六四)

⑧では宮から召人としての宮邸入りを提案されてもなかなか決断できずにいる折も折、またも男たちが寄ってきて誤解されるような事態になつて「つつまし」と思うのだから、式部自身宮邸に参りたい想いはありながらすすきりと思ひ立てないのである。「なほ思しめし立て」と宮に強

く勧められた時も「いとつつましうて、すがすがしうも思ひ立たぬ」(七三)とほぼ同じ表現で、ためらう姿が繰り返して語られる。

こうしてみると、和泉式部日記の「つつむ」「つつまし」は、恋の発端には小舎人童の無沙汰の挨拶、二人がなかなか信じ合えない時期には宮の「思しつ々む」「つつまし」、互いの心が寄り添って宮邸入りの話が出て来る時期には式部の「つつまし」と、藤岡忠美氏の宮と式部の関係の進展の三段階(『新編日本古典文学全集』の和泉式部日記の解説、小学館一九九四年九月)に沿って認められる。宮と式部で「つつまし」が見られる時期が異なるものも的確と考えられよう。

五 落窪物語

落窪物語では「つつむ」七例、「つつまし」一一例が認められるが、恋に関しては三例でしかない。落窪女君が男君の道頼に侵入された時、単衣もなく桂の下に袴一つだけの惨めな衣装だったので恥ずかしさに汗もしとどになり、後朝の文が届いても「はづかしうつつましくわびしくて」(四八)返歌もできなかつたが、翌晩あこぎの活躍で衣装も室礼も整うと男君も「つつましからず臥し」(五二)、女君も時々返事している。「つつまし」から「つつましからず」で、女君の恥と気兼ねと哀しみが一転して琴瑟相和の喜びへと変わっていく。そして女君を救い出し、二条に据えて、本邸に手回りの品を取りに行った男君は「今の間いかにうしろめたうこそ。」と喜びの和歌を贈つて「なかなかつつましくなむ」と照れている。歌物語や蜻蛉日記、和泉式部日記とは異なるのである。女君から継母へは「つつむ」二例、「つつまし」一例の三例が認められる。

①「さてあらぬ時は、よくやは聞こえたまひてや。上の御心なつつまきこえたまひそ」と言へど、いらへもしたまはず。

②「つつましきことのみ多う思されたる世は、離れたまひぬべしや。心安き所求めてむ」と細やかに聞こえたまへり。

(落窪物語・一・二四)

①は道頼から恋文が来たときで、北の方の許可を得ようとする女君にあげて返歌を勧めるときのことばで、「上の御心なつみきこえたまひそ」と、継母の意向に遠慮しないようにと忠告している。しかし、女君は返信しない。以後、道頼は次々と文を贈るが、女君の返歌はない。道頼から、女君は「いみじうものつつましきうち」遠慮深い人柄なので懸想文の扱いも知らないのだろうか、それにしても返事がないとはと不審がられて、文遣いの帯刀が妻のあこぎから継母を「おぢつつみたまへ」と聞いていると弁解している。そして、逢瀬を持って相思相愛となつてからは②のように男君から遠慮することばかり多い邸から出ませんかと誘われている。注意すべきはこれらが女君本人の感覚ではなく、すべてあこぎや男君など、第三者の類推によるものだということである。ところが、その継母は夫の中納言に気兼ねしている。

③名を付けむとすれば、さすがに、おとどの思す心あるべしとつつみたまひて、「落窪の君と言へ」とのたまへば、人々もさ言ふ。

(落窪物語・一・一七)

継母は女君を劣悪な環境に住ませ、呼称も姫君待遇の「御方」「君達」とは呼ばせない。女房扱いをしたいのだが、夫の中納言がどう思うかと「つつみたまひて」「落窪の君」と呼ぶよう要請し、女房たちも従ったという。夫の意向を顧慮して「君」を付けて呼ばせたのである。継母は女君が貴公子を通わせていると知った時も、従者風情に通じたとねじまげて女君の不行跡を夫に讒言しているし、男君の仕返しに遭うと夫に泣いて訴え、夫が邸を女君に譲った時には私と娘はどうなるのかと愁訴し

ている。逆に、夫が継母に「つつむ」ことはない。継母は夫を頼りとし、その意向に従っているのである。女君もまた夫の道頼に遠慮している。二条の邸に据えられ、男君の両親とも対面を果たして幸せななか、女君が父親に所在を知らせたいと願っても、夫の道頼に継母を「今少し懲ぜむ」と思うからと停められ続けて、「つつみてのみ過ぐしたま」(一九九)い、父との対面がかなった時も「つつみてなむ」(二四五)とその旨を詫びている。

娘もまた父に「つつ」んでいる。面白駒と露頭をしまった四君は、婿扱いをせよと父に命じられて、「おとどのかくのたまふに、つつみて」(二六五)、面白駒が来ると嫌々ながら父の意向に従っている。中納言が財産分与を女君に有利に行つたときも、男君は辞退して地券などを三四君に渡そうとすると、娘たちは「昔人の御本意たがはむ、いかでかかつみはべるを」(二九七)と、父の遺志に反することはためられると辞退している。夫、父を頂点とするヒエラルヒーの世界が窺われよう。

その意味でつぎの例は興味深い。

④事果てて、大将殿「今はいざたまへ。部屋にもぞ籠むる」とのたまへば、「けしからず。今はかけてもかかることなのたまひそ。忘れざりけりと聞きたまはば、思ひつつむこと出で来なむかし。」

(落窪物語・四・二九〇)

父の四九日の法要が終わり、男君が邸に帰ろうと誘う時に、女君は三〇日を超えて四九日まで滞在しているので、このままだとあの継母があなたを物置に閉じ籠めるよ、と以前の虐待にまつわる冗談をいうと、女君が親しくしている今はそんなことをおっしゃらないで、私が昔の事を忘れていないとお聞きになったら、継母が私に「思ひつつむ」、遠慮することがきつと出てきましようかと窘めている。これも、女君の継母への遠慮同様女君の類推に過ぎないのだが、ここで継母から女君への顧慮が語

られることで、女君と継母の立場が逆転したことを示し、物語の展開を如実に示しているといえよう。

こうした「つつむ」「つつまし」から見えてくるのは、作品成立時に家父長制が行われていたかどうかはともかく、夫や父を頂点とし、妻や娘はそれに従うという家族の世界である。落窪物語は継子いじめと男君の復讐の物語と考えられているが、藤井貞和氏は女君の結婚を語ると説かれ、私も「あふ」と「対面」や縫製技能から継子の幸いがいかに実現されるかを辿った（「落窪物語の語彙と表現」二〇〇七年三月、「落窪物語の主題と表現―服飾姿表現から―」二〇一〇年五月）が、「つつむ」「つつまし」からみていくと、中納言を頂点とする家族の物語に男君を頂点とする家族の物語が関わる、家族の物語と解することもできよう。

この物語には他にも蜻蛉日記に認められた挨拶としての言い訳表現があこぎから元同僚への文、女君が名乗り出た後異腹の姉妹に交誼を求める文に認められる。さらに、

⑤いとつつまじうて、うつぶしつ々見あひたり。

（落窪物語巻三・二一六）

⑤では二条邸に集められた新参女房が男君に対面して「つつまし」と遠慮している。推参して初めてのお召しなので顔も上げられず、横目で互いを窺う緊張が「つつまし」で語られている。こうした公の場での緊張を語る「つつまし」はこの物語に初めて見える。

家父長的な家族のありようといひ、女房階級、主人階級、それぞれの挨拶の手紙といひ、仕える場での緊張といひ、落窪物語で物語に日常性が取り入れられるようになっていといえよう。

六 うつほ物語

うつほ物語では「つつむ」二七例、「つつまし」一四例の計四一例が

認められるが、あて宮求愛が一つの要素であるにもかかわらず、恋愛に関するものは一四例にすぎない。

①「あが仏、おろかなるにな思しそ。さりともかくてやむべきにもあらず。ただつつまじきほどばかりぞ」とのたまひて、起き出でたまふに、
（うつほ物語・俊蔭・五七）

②「この頃ものせむと思へど、心ありともやと思へば、つつまじうてなむ。のたまはむにを。」
（うつほ物語・国譲上・七〇）

①は若小君、後の兼雅が俊蔭女と契つて永の愛を誓うところだが、「ただつつまじきほどばかりぞ」と、まだ元服もしていず親がかりの身なので親に気兼ねして思うようには通えないと予め釈明し、成人したら再びとの含みを持たせたのである。俊蔭女と契る男を、親に気兼ねする身に設定することで、仲忠の神童性、秘琴の伝授が活きてくると考えられる。

「つつむ」歌の型では、あて宮に仲澄が「潮の海も身につつまるるものならばかひなきまでも知らせざらまし」（藤原君一七三）と求愛する歌や、継母が忠こそこの言いよりと讒言した「いますながらずは何かつつまむ」（忠こそ二三〇）の「何かつつまむ」は二型の告白で五例、春宮が正頼にあて宮を所望した時、実忠の動揺が顔に出て、「その道、人目つつまれるものか」（菊の宴二四）と恋の道は学識のある者でも乱れるものだと噂されているのは八型である。

②は独自で、春宮があて宮に、小宮を訪れようと思うのだが、「つつまじうてなむ」（国譲上七〇）、あなたに誤解されないかと気兼ねでできないのだと許可を求めている。兼雅が女三宮への夜離れを「つつまじかりつる」（蔵開上三九三）と気にするのも同じである。また、あて宮に失恋した弾正宮が「年ごろは身の数ならぬを思ひたまへつつみて」（蔵開上四二三）と卑下したり、同じ邸にいたのに侵入しなかったのを「幼かりければこそ、さりぬべき折ありけれど、人々の心をつつみつ。今ならまし

かば、かくねたき心地せましや」(国譲中一七九)と遠慮したとっており、純情さが香り立ってほほえましい。

これらは基本的に恋する男や夫が慕う女性や妻に「つつまし」と思う例である。

④「王昭君を胡の国へ遣りたまへる、楊貴妃を殺させたまへる帝、なぐやありける、太政大臣は妻を思ひたまひつれば、それにつつまたまへるにこそあれ。すべきやう必ず、と思ふを、さる心知りたまへれとなむ」。

(うつほ物語・国譲下・二六二)

春宮が登極した際、誰を立坊するかという争いが起こるなか、あて宮腹の立坊を望んで姉妹たちがアリストフアネスの「女の平和」よろしく梨壺に繋がる夫を閉め出して、梨壺腹の立坊をめざす后と対立するのだが、④では中宮が兼雅に、長兄の忠雅は妻に遠慮して、姪の梨壺腹を立坊しないだろうと判断し、兼雅にも文で「そこにもや、むかしの懸想人の心つつましなんどて」あて宮に遠慮して、娘の子を支援しないのかと詰問し協力を要請している。これは政治と思慕が絡んだ「つつまし」だが、愛情関連の場合、男は女に「つつみ」「つつまし」と思うが、逆に女が男にという事例は見当たらない。

むしろ、うつほ物語で目に付くのは、社会生活上の「つつむ」「つつまし」、人と人との関係を円滑にする用法である。

⑤「そなたにこそ参り来むと思ひたまへつれ、御傍ら守りのひまなくものしたまふなれば、思ひたまへつみつるほどに、いとかしこく渡らせたまへるをなむ」と聞こえたまふ (うつほ物語・国譲上・八九)

⑥「参りはべる時は、必ず消息聞こえさすれど、人も聞こえ継がぬは、聞こえさすとて、のたまはせやすらむとて、つつましくなむ」。

(うつほ物語・国譲上・四五)

⑦右大将、「たびたびの喜びを、御方にのみなむ。一の宮の御徳なら

ずは、かくその人にも侍らず、ただ今まかりなるべき職にもあらぬを、かつは思ひたまへつみ、かつは喜び聞こえさする」とあれば、(うつほ物語・国譲上・一一七)

⑧「俊蔭、後侍らず。文書のこととはわづかなる女子知るべきにあらず。二、三代の間にも後出でまうで来ば、そがためなり。その間霊寄りて守らむ」となむ申して侍る。それにつつまて、今まで奏せで侍りつる」。

(うつほ物語・蔵開上・四三八)

⑤はあて宮が久しぶりに会った女一宮に、そちらに伺いたいと思つていただけれど、仲忠がつきつきりなので遠慮していましたが、そちらから来てくださったんですねと、無沙汰を詫び、来訪に感謝している。こうした親族間での挨拶の言い訳表現二例はともかく、⑥では涼があて宮にしばらく参じなかつた言い訳をしており、これは官人としてのきわめて政治的な交遊である。⑦は右大将の仲忠が正頼の推挙で大納言を兼ねることとなり、太政大臣、右のおとど、右大将、仁寿殿に参上して、重職に堪えられそうもないと謙遜し、昇格のお礼を言上している。実忠もあて宮にお礼言上に遅参したことを詫びている。⑧は仲忠が俊蔭秘蔵の文書類について奏上しなかつたことを俊蔭の遺言だったので言い訳している。また、あて宮に依頼されて春宮に手本の献上をする際にも早くに書き上げていたが、不満足な出来で「つつましようてえ参らせはべらず」(国譲上五五)と遅くなった言い訳をしている。こうしたいわゆる政治的な言い訳表現は五例認められる。

⑨かくてみな探韻す。大将詩を賜りに参るを、(中略)いささかつつみたる気色もなく、いとめやすくて入りぬ。

(うつほ物語・国譲下・三九〇)

⑨は嵯峨・朱雀両院行幸の作文で探韻を賜る際、仲忠がすこしも臆さず堂々と感じよくふるまって院を感心させている。吹上下巻の御遊でも仲

忠と涼が緊張することなく堂々と能力を発揮している。これは落窪物語の女房たちとは逆で、仲忠は公の場で緊張したりせず、衆目を集めているとその理想性を語っている。うつほ物語では官人生活で人間関係を円滑に進めるための挨拶としての言い訳表現や、公の儀式などで緊張せずふるまう姿を「つつむ」「つつまし」で描出しており、楼上巻上下に「つつむ」「つつまし」が認められないのも、貴族の政治的生活からは少し乖離して描いているためだろう。うつほ物語では政権に関わる蔵開巻や国譲巻で「つつまし」がめだち、日常性が深く入り込んでいるのである。

七六 枕草子と紫式部日記

枕草子や紫式部日記はより日常的現実的で、女房という仕事の場での「つつまし」が多い。

①御文取り次ぎ、立ちゐ、行きちがふさまなどの、つつまじげならず、物言ひゑ笑ふ。「いつの世にか、さやうにまじらひならむ」と思ふさへぞつつまじき。(枕草子・宮に初めて参りたるころ、三〇八)

②弁の内侍はしるしの御管。紅に葡萄染の織物の桂、裳、唐衣はさきの同じごと。いとささやかにをかしげなる人の、つつまじげに、すこしつつみたるぞ、心苦しう見えける。(紫式部日記一五四)

①は初めて出仕した清少納言の体験を語っているのだが、恥ずかしくてたまらないその目には先輩女房たちがお手紙を取り継ぎ、立ったり座ったり、行き来している様子が「つつまじげならず」遠慮せず自在にふるまっていると映り、いつそんなふうになれるのだからかと思うのさえも憚られると初々しい。一方、定子の求めに応じて和歌を記す女房たちが「例、いとよく書く人も、あぢきなうみなつつまれて、書き汚」(清涼殿の丑寅の隅の)したとも記しており、枕草子にはこうした女房のふるまいに「つつむ」「つつまし」が七例認められる。②の紫式部日記でも帝の

土御門行幸で御璽の笥を捧持している弁の内侍が「つつまじげに、すこしつつみたる」と気恥ずかしそうにやや固くなっている。これらは公の場での緊張である。必ずしも男性官人のように儀式や晴れの場の風姿だけではなく、女房や随身が主人に対して緊張する、職務を果たす上での社会的な場における緊張である。そのためか、枕草子では「つつみなくいふ」ことを非難し、紫式部日記では上臈女房が「つつまし、はづかし」と引つ込み思案すぎて職務に支障を来していると嘆いている。女房としての目が働いているのである。

こうしてみると、「つつまし」からは源氏物語に先行する文学の二つの流れが見て取れる。和歌や歌物語、蜻蛉日記、和泉式部日記では「恋」に関して認められるが、落窪物語やうつほ物語では日常の社交で潤滑油となる挨拶の言い訳表現が多用され、枕草子紫式部日記では職場でのふるまいに多用されており、ぐっと幅が広がって貴族社会の日常が現れてくる。落窪物語は家族の物語、うつほ物語は恋愛というより、恋情は政務に関わる人々の交流に通底しつつ政権の奪取へと進んでいく物語、枕草子や紫式部日記では女房の生としての後宮生活が立ち現れてくる。源氏物語はこうした先行文学とは逆で、外側の行動を記述する「つつむ」よりも、心情の揺れを描く「つつまし」の方が多く、会話や手紙よりも地の文に多用されている。源氏物語で先行文学がどのように生かされ、異化されていくのか、それについては次稿で追究していきたい。

注 八代集は『新編国歌大観』、その他は『新編日本古典文学全集』を用いている。わたくしに表記を変えた所がある。括弧内に出典・巻・頁数などを示した。